

---

# エピソード4：教室の因果律

なつき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エチユード4：教室の因果律

### 【Nコード】

N3527M

### 【作者名】

なつき

### 【あらすじ】

因果律について、とじとじと。

\*習作です。

あたしは濡れていた。べつに好き好んで濡れたわけじゃない。だいたい誰が教室でびしょ濡れになんてなりたがるんだ、そんな馬鹿いるはずない。そう、あたしは教室にいる。呆然と突っ立っている。馬鹿みたいに。

喧騒は遠ざかってゆく。あたしを馬鹿にする喧騒だ。甲高い笑い声が響いて、楽しそうにあたしをけなして、あたしは俯いていて前髪からしずくが滴って、何だこれ、何なのこれ、何なのよこれ。

野球部のかけ声が聞こえる。吹奏楽部のトランペットが聞こえる。ついでにからすの鳴き声も聞こえる。あたしがこんな目にあっただって、世界は何事もなく動くわけか。平和な放課後。当たり前のことをもって、自嘲気味に笑う。馬鹿、ほんと、あたし。

唇を舐める。すぐそこには青いバケツが転がっている。目の奥がつんとしたのなんて気のせいだ。

突然教室のドアが開いて、あたしは反射的にそちらを見た。

高野だった。高野佳乃子、このクラスの変わり者。変人すぎて、もはやいじめられもからかわれもしない。あたしは徹底的に、高野を蔑んでいた。社会から外れた者として。でも今は、高野のほうはまだましな立場にいるわけだ。高野以下の、あたし。可哀想なあたし。笑えない。

高野は後ろ手にドアを閉めながら、あたしをじつと見つめた。猫のような目だった。何にも言葉で言えないくせして、視線で何かすべてを伝えようとしない瞳。だからこいつ、嫌なんだ。得体が知れない。

しかし高野は、口を開いた。

「因果律って知ってる」

言い切るようなその言葉があたしへの問いかけだと気がつくのに、すこしばかり時間がかかった。

「……インガリツ？」

「知らないのね。まあやっぱり。知るわけないか」

呟くように言いながら高野は、窓際の自分の席へと歩いて座った。高野がまともに喋ったの、はじめて聞いたかも知れない。意外にも、幼く響く声だった。

高野は机のなかから何か分厚い本を取り出し、読み始めた。そしてそのまま、沈黙に突入。あたしは何だか理不尽な気もちになって言う。

「何か言うことないの」

「言うこと」

高野はそう言い、無表情にあたしを見上げる。またも断定形で質問してくるかこいつは。日本語の喋りかた、いっぺん勉強し直したほうが良いんじゃないか。そんなもどかしい気もちを抑え、あたしはつづける。

「明らかにおかしい状況でしょ、これ。何かさあ、言うことないの。どうしたの、とか、何かあったの、とか」

「聞いてほしいの」

「……べつにそういうわけじゃないけど」

「じゃ聞かない」

そう言い高野は、自分の世界に戻って行くこととする。あたしは何だか腹が立ってきて、ぶつけるように言った。

「いつも何か、悟ったような顔しちゃってさ。それであんたは自分が強いとか思ってるのかも知れないけど、違うから、相手にされないだけだから。そのぶんあたしは相手にされてるだけまだ、」

まし、と言いそうになって、ふっと口をつぐんだ。心がひやっと醒めた。本音を、自分も聞きたくない本音を聞いてしまった気がした。

高野は、本の黄ばんだページから目を離さないで言う。

「因果律っていうのは」

「はあ？」

「すべてのものごとは原因がないと成り立たないということ」

あたしは、黙った。高野は独り言のように言う。

「すべてのものごとには原因があるという前提がある。まあ至極当然よねそんなこと。でそんなこともわかってないお馬鹿な人たちがいるわけ。ねえでも吉田さん」

高野はあたしの目を、見据える。

「あなたわかったでしょう。そのこと」

「……何、それ」

「因果律よ」

高野はその、小さな唇でつづける。

「わたし見たわあなたが飯野さんの筆記具盗んだところ。体育の靴勝手につかったところ。他にもいっぱい見たわ。ねえあなたって案外馬鹿なのね」

「なっ、」

しかし言葉はつづかなかった。顔に血がのぼってくるのがわかる。こいつを思い切り、殴りつけてやりたい。拳は震えていた。しかし、しかし。

「まあそういうお年頃なのよねきっと。でもあなた被害者みたいな顔しててそういうところも馬鹿だと思っわ」

こんなにもまっすぐ、非難されたことがあっただろうか。切りつけるように、えぐりつけるように。拳の力が、だらんと抜けた。そしてあたしは、沈黙に入った。

高野は視線を逸らさない。

「因果律、学んだんじゃないあなたも。良かったわねひとつ賢くなつて。ねえ因果律の意味わかるでしょう身に染みて」

あたしは強く思った。一種の確信をもって。

一瞬後、あたしはきつと頷くだろう。

高野はそして、再び口を開く。

「因果律よ」

ああ、今日は、何て散々な日だ。

思った瞬間、あたしは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3527m/>

---

エチュード4：教室の因果律

2010年10月19日11時26分発行